

WEP

ウェブ俳句通信

VOL. 91

俳句通信

特別作品25句 ● 宇多喜代子「さくら時」

特集 ● 『森澄雄全集(全5巻)』を読む

第一巻(俳句Ⅰ)を読む

虚実のはざままで 青山 丈

第二巻(俳句Ⅱ)を読む

透徹にして自在の句境

——第九句集「餘日」から第十五句集「蒼茫」まで

波戸岡 旭

第三巻(文集Ⅰ)を読む

森澄雄の詩魂と含羞

——戦中・戦後の批評文をめぐる 田中俊廣

第四巻(文集Ⅱ)を読む

「花眼」のひと

——その眼が捉えた人生 小田切輝雄

第五巻(文集Ⅲ)を読む

“座”の歎びと寂寥 滑志田 隆

【実力作家30句】

前澤宏光「晩冬初春」

山崎千枝子「草駒返る」

【稲畑廣太郎50句】

「初旅」

【特別作品 秦 夕美30句】

「悲歌楽歌」

【特別作品 柳生正名30句】

「薄氷心中」



● 作品 ●

黛 執・茨木和生・須原和男・松岡隆子・北兄弟花・
川崎慶子・山元志津香・松浦加古・加藤瑠璃子・
檜 紀代・米山光郎・瀬戸清子・広瀬恵美子・
柏木とよ太・今瀬一博・田中亚美 ほか



初夏の津軽

photo by Norio-Osaki

書齋にて

木内
徹

道遠く生は短し
外套脱ぐ

私は書齋と書庫を持つのが若いときからの夢だった。読みもしないのに買い入れるだけ買い入れ、いったん買々と捨てることのできない書籍が溜まりにたまって、二階の床が抜けそうになったとき、思い切って四十八歳のときにこの書齋と書庫となるべき家を手に入れたとき、やっと自分も文芸に携わる人々の仲間になったのだなという空想を描いた。しかし、この書庫にある書籍をどう処分しようかと悩む年齢にすぐ到達してしまった。



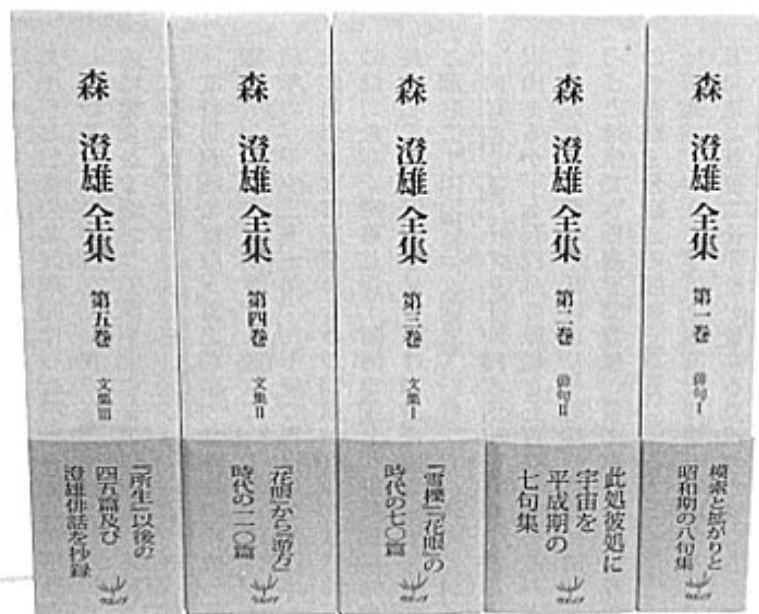
さくら時

宇多喜代子

老人の眉目動かぬ夕桜
春夕べ新聞新聞紙となりぬ
親の顔うららの春に紛れたる
眼張一尾崩しにかかる夕べかな
風船の白のひとつが大灘へ
褒められている平明な薄氷

特集 森 澄雄全集(全5巻)を 読む

昨年10月、弊社から「森澄雄全集」全5巻が刊行されました。
その各1巻ずつを5人の俳人に読んでいただきました。



初
旅

稲畑廣太郎

百態の中の一態雪の富士
冬晴や日の本富士を要とす
冬雲の去来富士現れ富士隠れ
還暦の節目に拝む雪の富士
小正月町に溢れてをりにけり

いなはた・こうたろう

昭和32年（1957）5月20日・兵庫県生まれ。母稲畑汀子の許で幼少の頃より俳句に親しむ。俳人高浜虚子は曾祖父。63年「ホトトギス」同人。同時にホトトギス編集長就任。平成12年「財団法人虚子記念文学館」理事。13年「社団法人日本伝統俳句協会」常務理事。17年「ホトトギス」雑誌退会及び副主宰に就任。25年「ホトトギス」主宰に就任。句集に「廣太郎句集」「半分」「八分の六」「玉簪」。著書に「曾祖父（ひいじいさん）虚子の一句」ほか。





前列右から 林氏、藤本氏、駒木淳子氏
後列右から 吉田氏、星野氏、工藤氏

ゲスト 工藤 進・駒木根淳子
林いづみ・吉田幸敏

ホスト 星野高士・藤本美和子

編集長 超結社句会の第32回目です。ゲストは「くちら」編集長の工藤進さん、「麟」同人の駒木根淳子さん、「風土」同人の林いづみさん、「朝」同人の吉田幸敏さん。ホストは「玉藻」主宰の星野高士さん、「泉」主宰の藤本美和子さんです。遠慮のない意見交換をお願い致します。

高士 では高得点の句からやっていきたいと思います。今日はまんべんなく点が入りました。そんな中で4点句。

傾ける幹傾ける巣箱かな

（池田）

淳子 平衡感覚を失うような感じが不思議さを醸し出していて面白い句だと思います。

いづみ 一読して景が見えて、このリフレインがくどくなくて、素直に心に入ってきました。

進 作者がやさしい方なのではないかと想像したんです。自分で幹を傾げるんですね。そして傾いた幹に巣箱をかけてあげる。愛情表現もたっぷりだし、「傾ける…傾ける…」に木の年輪も感じますし、作者のやさしい句づくりに感銘致しました。

高士 わたしも頂きました。自分が傾けたというお話が、い